
自由な世界で

九鬼龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由な世界で

【Nコード】

N8075V

【作者名】

九鬼龍一

【あらすじ】

現代日本での縛られた生活に嫌気がさした主人公は、ある日、何の気なしに海に向かい、何もかも忘れて海に飛び込む。

深く深く潜り、水面に顔を出してみればそこは異世界だった。

初めは異世界と気づかない主人公。だんだんと状況を把握していく。現代日本の縛られた生活から自由になったのだ。

主人公は、自由な世界で何を成すのか。己の実力のみで勝ち取る自由な旅が始まる。

主人公最強とまではいきませんが、それなりに強いと思います。

暴力・残酷表現があり得ます。ハーレム要素もあるかもしれませんが、基本的にこの主人公の8割は鬼畜、1割は気まぐれ、1割は優しさになると思います。

ブログ（前書き）

初執筆、初投稿です。

とりあえず小説を書き続けられるかを確かめることが第一目的です。
まだまだ未熟ですがゆっくり見守っていただければ幸いです。

ブローグ

俺は何のために生きているのか？

親のため？家柄のため？

田舎のエリート意識から脱け出せない親、所詮田舎の地主程度の家柄。

本来ならば日本全国、いや、世界を相手にするような仕事に就くことすら可能だったろうに、地元に戻って家を継げという親の意見、というより、とある脅迫を含んだ強硬な意見に逆らいきれず、地元で公務員などやることになった。その過程で同時に彼女さえ失った。

公務員としての生活は単調だった。

出勤し、書類を作成し、現場を確認し、また書類を作成の繰り返し。何か判断を迫られることがあっても俺にとって難易度は低いものだった。

そんな親の思い通りの毎日に生きる氣力を失いつつあるときだった。

ある日の夕方、俺は日々に嫌気がさして、車を運転し海に向かった。気分が落ち込んだら海へ、なんてのはありがちなことだと思いはしたが、今思うとどうにか広い世界を感じたい一心だったのかもしれない。

スーッと浜辺に立つと冷たい風が吹いたのを覚えている。季節はまさに冬になろうとする頃だった。

広い空、広い海、遥か彼方の水平線を眺めていると、俺は何のため

に生きているのか？と思わずにはいられなかった。
広い世界で自由に、思うがまま自らの能力で生きていきたい。
そうしているうちに何かが身体の中で弾けたような気がした。気が
付くと、俺は海に向かって走り出していた。
スーツのまま、後先など考えず海に飛び込む。意外に深い気がし
ない。世界が闇につつまれるなか、沖に向かって潜る。深く深く…
…。

深く潜るにつれて呼吸が苦しくなってくる。やがてどうにも耐えら
れなくなり、生存本能に従い海面に浮上する。
スーツが身体に絡み付くが、なんとか海面に顔を出し、浅く早い呼
吸をしていると、生温い風が顔を撫でた。

生温い風？そんな季節だっただろうか？
心なしか海水の温度も上がっているような気がする。
いや！？そもそもこれは海水か？
先程から唇に僅かに触れる水からは海水特有の塩辛さが感じられな
い。

何かが起きている。

そう感じた俺はとにかく浜に戻ることにする。
振り返ると、暗闇の中に微かに白い浜が見える。

なんとか浜に辿り着いた俺の目線の先には、あるべき俺の車が見あ
たらない。

それどころか、防波堤や自動販売機、公衆トイレなど来たときには

あったはずのありとあらゆる人工物が見あたらない。

いったい何が起こったのか？

人工物が無くなったことに気をとられていたが、よく見ると周囲の地形も違うようだ。

どうやらここは違う場所……、ということになるのか。

なぜだ？あんな短時間で流されてしまったのか？

まずは、ここがどこなのか、場所の確認だ。しかし、周囲に明かりはない。曇りがちで星明かりは少なく、月もない。暗闇といってもいいだろう。よく知らない土地を暗闇の中歩き回るのは危険だ。

どこに流されてしまったのか分からないが、それほどではないだろう。

どのみち明日は休みだ。とりあえず夜が明けるまでここにとどまろう。

そつと決めたら、まずはスーツなど着ているものを全部脱ぎ、水を抜き乾かす。

素っ裸だが、寒さは感じない。小春日和にでもなったのだろうか？何はともあれラッキーということで、パンツだけを身に付けばんやり朝まで過ごすことにする。

うんざりする家を離れて、非日常の香りがするこのひとときを楽しもうと思う。

うつらうつらしながら、久しぶりに何もかもを忘れたような夜が明けて、目の前の景色に驚いた。

海に入って知らぬ間に流されたと思っていたが、目の前に広がるのはどう見ても湖だ。

うつすら対岸が見えるし、俺のいる浜から左右を見ると対岸まで大きな弧を描いて陸が続いている。

これは湖だ。

海から湖に流されるなど考えられない。そもそも俺の住んでいる辺りにこんな湖はなかったはずだ。

どういうことだ？

ここはどこなんだ？

落ち着け。冷静にならねば。

スーツは生乾きだが、まあ着られる程度には乾いている。

とにかく人を探そう。誰かに訊くなり、何かの地図などを見るなりしないと状況が判断できない。

辺りを見渡してみる。まだ夜明けといっても、太陽が水平線からまさに頭を出そうとしているところである。

と、煙が立ち上っているのを見つけた。

煙というか黒煙である。それも一筋ではなく幾筋も。

これは……、火事か？

何かが燃えている。

山火事でもない限り、そこには人がいるはずだ。行ってみよう。

生乾きのスーツに革靴で走る。

そこには、火事で燃える小さな村があった。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、表現の不十分なところなどの批評、感想をお待ちしております。

其の壱（改）

火事だ。小さな村が燃えている。

いや、火事だけではない……ようだ。

悲鳴が聞こえる。馬の蹄の音もだ。

そして弾ける金属音と怒声。

戦っているのか？

そもそも何が起きている？

近づくべきではないという本能を無視して、まだ火の手が及んでいない方面から村に近づく。

無論、誰にも見つからないように。

状況が分からないうえに、何か日本では考えられないような戦っているとは思えない音が聞こえてくるのだ。できる限り隠密行動をすべきだ。

慎重に、村はずれの家に近づき、家の陰から村の中央を覗き見る。

そこには、まさしく戦っている男たちと、焼け出されたか、惨殺されたか分からないが、死体が多数転がっていた。

一方の男たちは、幌付きの馬車がつながれたこの村では大きめの家を背に戦っている。地上に立つ者もいれば、馬上の者もいる。およそ10人前後といったところか。

他方の男たちは、皆馬上にあつて、大きめの家を包囲するかのよう

に動きながら戦っている。こちらはずいぶん多く30人近くになるうか。村の他のところからも悲鳴が上がっていることを考えるともつといるのかもしれない。

前者は、身なりがある程度きちんとしているようだが、後者はずいぶんと身なりが汚い。というかあれはいわゆる山賊の類ではないかというような服装だ。というか山賊だろ、あれは。

なんだこれは？

映画の撮影か何か？

俺は流されてどこかの島に建設された映画村にでも迷い込んだのか？いや、しかしさっきの場所はどう見ても湖だった。理屈に合わない。

などと考えていると、家を背にして戦っている男たちの一人が何か光を放った。耳鳴りがした、と思ったら、山賊たちの数人が血を噴きながら吹き飛んだ。

なんだ？飛び道具か？？

その光に反応したのか村の他のところに散っていたと思われる山賊たちの仲間が集まってきた。

山賊たちの一人も同じように光を放つ。この光は赤みがかって見えた。

瞬間的な爆発！

家を背にする男たちは吹き飛びこそしないもののずいぶんとダメージを受けているようだ。

山賊たちは一気にたたみかける。

槍、偃月刀が振るわれる。家を背にする男たちは信じられないほどにそれらを受け続けていたが、ついに耐えられなくなったのか、一

人また一人と血を流し、倒れていく。

ついに最後の一人も力尽きた。

山賊たちは雄たけびを上げる。

そして、山賊の頭と思われる男と数人は、倒れた男たちが守っていたと思われる大きな家に入っていく。残りの男たちは、頭に指示されたのか、何人かずつで村の各所に散っていく。

しまった。と、思ってももう遅い。

数人の山賊たちに見つかってしまった。

今にして思うと、頭は生き残りがいないか確かめてこいとかそんなことを指示したに違いない。

馬で俺の退路に回り込みながら、一人は大声で仲間を呼び集めている、ようだ。

というのは、俺はこいつらの言葉がなぜかわからない。

「# \$ % % & + * ‘ & ” % \$! ” \$ \$ % % & 」

何を言っている？目の前の男が俺を指差して、何か言っている。

隣の男もそれに何か答えているが、さっぱりわからない。

どうなっている？ここはどこで、こいつらは何人なんだ？

アジアの言語のようでもないし、欧州の言語とも思えない。

俺はどこに来てしまったんだ？

などと思っているうちに、山賊の仲間が集まってくる。

どうにか逃げられないかと俺は周囲を抜け目なく見ていたが、馬の脚からは逃げられそうにない。

頭がやってきた。俺を見て、何か一言。

「＃\$%&’，’，」

「おい、何を言って……」

と、俺の背後に気配。いや、殺気。

思考する間もなく、横に跳ぶ。

案の定、俺のいた場所に槍が刺さる。

頭は「殺れ」とでも言っただけに違いない。

さつと血が冷たくなった気がした。本気で殺す気だ。

ふざけるな。ふざけるなよ！

ただで死んでたまるか。

殺られるくらいなら殺つてやる！

俺は横に跳んだ勢いを緩めず、さらに一步、二歩。

横にいた男が乗る馬の顔に右手で一撃。

馬が暴れ、男は偃月刀を取り落す。

狙い通り。俺は偃月刀を拾い、暴れる馬の脚に切りつける。馬は倒れ、馬上の男が振り落され、その男の首には俺の振るった偃月刀が刺さっていた。

素早く偃月刀を引き抜き、周りを見る。山賊たちは、反応が鈍いのか、啞然としているのか、この光景を見たままほとんど動きがない。

先手必勝。目の前にいた男に襲いかかる。山賊たちは皆馬上にいるため、跳びあがらないと胴体にも届かない。一気に走り寄って、跳びあがり、男の太腿を足場に首に斬りつける。

驚くほど軽く跳べた。偃月刀が軽い。
身体が軽い。世界が遅く見える。

山賊たちがやつと立ち直ったかのように反応を見せる。

遅い。既に横移動し、二人目に狙いを定めている。

今度はただ単に跳びあがり、回転を加えつつ首に斬りつける。
噴き出す血しぶき。

と、何かが光る。

アレか！？

可能な限り回避。主が死んだばかりの馬を盾にしつつ、横に回避する。

馬の胴あたりで何かが爆ぜる！

あの赤い光は危険だ。何かは分らないが、爆発するようだ。
優先的に爆発を起こす奴を殺ろう。

敵の動きは遅い。これならいける！

素早く接近、馬に斬りつける、奴らの脚に斬りつける、跳び上がった首に斬りつける、等々攻撃パターンを使い分けながら、一人一人殺る。

瞬く間に屍をさらす山賊たち。

未だに言葉は分からないが、逃げ出すつもりはないようだ。
ふん、好都合だ。復讐の憂いがなくなる。

しかし、どういうことだ？身体が軽いのみならず、敵の動きが遅すぎる。

まあ、おかげで助かったわけだが。

まずは、こいつらを皆殺しだ。
と思ったら、あと一人か。

どうやら頭らしい男だ。

さあ、最後の一騎討ちといこうか！

頭がこちらに向き直り、俺が偃月刀を振り上げようとしたとき、頭
は何かを呟き手が赤く光る。

もはや条件反射で回避。

回避に遅れて左後方で爆発！

回避と同時に踏み込み、跳び上がり一気に首を狙う。

奴の偃月刀のガードは……、間に合わない！奴の首に深々と偃月刀
が刺さる。

勝負ありだ。

皆殺し。

俺がやったことだ。

なぜだか、何の感慨もわいてこない。

勝利の高揚も、殺人の後悔も。

ここは何かが違う。

今までとは何かが違う。

おそらく……、何もかもが。

異世界、なのだろうか。

ここには自由がある。

弱肉強食だ。強い者が生き残る。

前の世界ではありえないことだろう。

この現実を、ありのまま、受け入れよう。

そう思うと冷静になったような気がした。
何だかんだと言っても、突然の出来事の連続に気が動転していた部分があつたのだろう。

さて、ここは異世界だ。

という前提で考えるか。まだ仮定ではあるが、そのほうが今のところ理解しやすい。

すんなりそういう仮定が出てきたのは、最近ネットで、異世界転生ものとかいうジャンルの小説を読み漁っていたからかもしれない。深層心理では、何もかも捨てて異世界に行ってしまいたいと思っていたのかもしれない。
今となつてはどうでもいいことだ。實際来てしまっているのかもしれないからな。

ここが異世界だとすると、俺はこの世界のことを全く知らない。
さっきの山賊たちの言葉が分からなかったことから、おそらく言葉も全く通じないだろう。
ネットの小説では、だいたいみんななぜか通じてたぞ。くそつ。
そう簡単にはいかねーか。

とにかく情報、あと金か。

幸い、村は全滅してるようだ。

言葉通り火事場泥棒でもするか。

まずは、あの幌付き馬車がつながれた大きめの家からだな。ちょうど村の中央近くにある。

思うに、あの家を背にして戦つてた男たちは傭兵とかそういう類なのかもしれない。

山賊たちも村の外周にある家には火をつけてるが、内側の方の家に

はほとんど火をつけていない。
もしかしたら、山賊たちは最初からあの家を狙っていたのかもしれないな。

家に近づいていく。

傭兵っぽい男たちは見るも無残な姿で死んでいる。

あわれ。しかし弱肉強食。死ぬくらいなら逃げればいいのだ。

さて、家の中には何があるのか。

……。

そこには、檻に入れられた女の子がいた。

其の壱（改）（後書き）

平成24年1月8日一部修正。

其の貳（改）

なぜ女の子が檻に入れられているのか？

女の子をよく見てみる。

年は見たところ、15歳くらいか。

サラサラの金髪はセミロングだ。

パツチリとした青い瞳。二重瞼で少し切れ長でもある。

鼻と口は小さく、唇は薄い。

頬は少し丸みを帯びており、あどけなさを残している。

肌は透き通るように白い。

そして……、耳が普通ではなかった。

女の子の耳は長く尖っている。

そう、まるでゲームや何かによく出てくるエルフのように。

特殊メイクか？

いや、まさかな。

ここが異世界だという前提で考えるとエルフということになる。

「おい、君はなぜ檻に入っているんだ？」

通じないとは分かかっていても話しかけてしまふ。

案の定、

「＃＄％＆’，，，％＃＃”＄＃””＃＃\$」

言葉は通じない。

「はあ。分からないよ。通じないんだ」

せめてもの仕草をつけて、返事をする。

「\$&&＃”＃！”＃\$\$\$”＃”＃%%％」

やはりわからない。

俺は首を振る。

すると、女の子は、何やら小声で呟き始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もはや、音としてすら聞こえないレベル……、いきなり、何かが光る。

さっきの経験からか、瞬間的に回避行動に移る。

一気に檻を回り込み、女の子の後ろに立つ。

爆発などは……、起きない。

「何だ？何をした？」

「ええつと……、えっ？あれっ？いつの間に後ろに！？」

ん？

「あ、あの、えつと、私の喋ってることが分かりますか？」

「あ、ああ」

「よかった。通じたみたい」

「いったい何をした？」

「あの、魔法を使ってあなたと私の間で言葉が通じるようにしたんです」

「……、そんなことができるのか？」

「ええ、言葉の精霊にお願いする魔法ですから」

ほう、精霊ときたか。

しかし、ここまでになると、もはや異世界であることはほぼ疑いがないさそうだ。

はあ……。

……、まあいいか。もともと、元の世界では生きる気力を無くしてたんだ。

この世界では俺はずいぶん強そうだ。細かな検証は後にするにしても、一人で山賊たちを三十人近くも葬れるレベルだ。十分だろう。この力をつまく使って、この世界で自由に生き抜いてやる。

などと、一人で考え事をしていると、俺の返事がないことに焦ったのか、

「あ、あのあの、申し遅れました。私は、エイナと申します。この度は、助けてくださって本当にありがとうございます」

は？別に助けたわけではないんだが……。

いまいち状況がわからん。

ここは助けた風を装って情報を聞き出すか。檻から出すかどうかはその後で決めよう。

こいつが善良なのかどうかもわからんからな。なにしろ檻に入っているわけだし。

「あー、待ってくれ。お礼なんかは別にいらない。自分の身を守っただけだ」

「でも、助けてくれたのは事実ですし……」

「それよりもちよつと訊きたいことがあるんだ。いいかな？」

「はい、私に答えられることでしたらなんでも」

「じゃあ、まず、ここはどこなのか教えてくれないか？道に迷ってしまつて分からないんだ」

「私もこの有様ですから詳しくはわかりませんが、ここはアクナル

ド王国の領内にあるチエズという村だと聞きました。ここからさらに南に行くとフィリオという街に着くそうです」

「なるほど……」

とりあえずこの村は全滅している。盗るもの盗ってフィリオという街を目指すのが妥当か。

もう少し情報がほしいところだな。この世界の常識とか。

それにこのエイナはおそらくエルフなんだろうな？なんでこんな檻に入ってるんだ？

訊く順番が大事だな。怪しまれたりすると本当のことを答えてくれなくなるかもしれない。

やはり先にどうしてこうなっているのかを訊いて、適当に同情したりとか共感したりとかして優しいふりしてうまく情報を引き出すかうまくいくかはわからんが、ダメ元でやってみよう。

などと沈黙考していると、エイナが先に質問してきた。

「あの、道に迷われたとおっしゃいましたけど、どのあたりからいらつしゃったんですか？」

「あー、そうだな、とても遠くだ。なんというか、君も知らないような東の果てからだな。だからこっちはあまりよく知らないんだ」

「そうなんですか」

日本は極東、まあ東の果てだから間違いではないかな。この世界の東の果てではないが。

この世界の東の果てには何があるんだろうな。まあいいか。しかし、こいつも信じてるのがアホなのか。

「まあ、とにかく、エイナはなぜ檻の中に入れられてるんだ？」

「あの……、私はご覧のとおりエルフ族の者です。エルフ族はあな
たち人間族からすれば珍しい種族だそうで、たまたま隠れ谷の外
に出たときに捕まってしまったのです」

「そうなんだ。辛かっただろうに。もう大丈夫だよ」

「はい、ありがとうございます」

「でも、珍しいとはいえ、なんでエイナを捕まえるんだろう？」

「それは……、私を奴隷にして……、売るためです。珍しいから高
く売れるみたいです」

「奴隷？奴隷なんてのがあるのか？しかし仮に奴隷にしたとしても
すぐに逃げられてしまうだろう？」

「奴隷制度をご存じないんですか？首輪の魔法契約によって奴隷に
なった者は主人の命令には絶対服従なのです。禁止されれば自殺も
できません」

よく見ると、エイナの首には黒い首輪がされている。

それにやはり魔法があるのか。しかも精霊やら何やらいろいろあり
そうだ。

しかし奴隷とはな……。最近読んだネットの小説でもよくそとい
うのを見かけたが実際にこうして体験するとは。

「ん？となると、エイナには主人がいることになるのか？」

「はい、私を捕まえた奴隷商人です。今この村にいるはずですが…

…」

「あー、村は全滅だよ。今、村には俺とエイナ以外に生きてる者は
いないはずだ」

「全滅？あの、奴隷商人の人も？そ、そんな……」

「ああ、そうだ。こういう場合奴隷契約はどうなるの？」

「……、あらかじめ権利が引き継がれることが契約中に織り込まれ
ている場合は新たな主人に引き継がれます。そうでない場合は、主

人不在となりますが、奴隷であることに変化はありません」

「引き継がれたかどうかてのはわかるの？」

「契約魔法が奴隷に新しい主人を知らせるのでわかるそうです。どうやら私は引き継がれてはいないようです」

「そうなんだ。ってことは主人不在って状態なんだ」

「はい、そういうことになります」

なるほど。奴隷制度があり、制度は魔法契約によって成り立っている、と。

で、奴隷は主人の命令には絶対服従か。

異世界なんだし、俺が奴隷にならない限りはそんな制度があってもかまわないが、この場合はあってよかったというべきか、ラッキーというべきか。

エイナは、顔は15歳くらいだが、体はなかなかグラマーだ。

ゆったりとしたワンピースだが、それでも胸のボリウムがよくわかるし、形もよさそうだ。

そして、腰はキュツとしまっていて、お尻はほどほどに大きい。

まさしく俺好みである。

主人不在だというならここはうまく俺の奴隷にしまっことはできるだろうか？

いろいろわからないことを訊けるし、夜の相手にもなるしで一石二鳥だ。

よし、そうしよう。

「主人不在ってのはどういうことなの？エイナは大丈夫なの？」

うまく心配しているかのように……。

「……、誰かが私と魔法契約を新たに結ばなければ……、1年以内に魔法契約によって死んでしまいます」

「なっ……」

「……」

死んじゃうのかよ。いやだなー死ぬのは。まあ俺は奴隷じゃないからいいけど。

しかし、エイナが死ぬのはもったいない。

「よし……、じゃあ、こういうのはどう？俺がエイナの主人になるよ。それでエイナは死ななくて済むはずだし、俺はエイナのことを大事にするよ？」

「えっ、ほんとですか？私を助けてくれるんですか？」

「ああ、まかせといてよ」

「っ……、うれしいです。ありがとうございます」

エイナは少しグスグスと泣き出してしまった。

「えっと、じゃあ、どうすればいいのかな？」

「え？あ、えっと、私の首輪に手をかざして魔法契約を結んでください」

結んでくださいって言われても魔法なんかできねーよ。

どうするか……？

仕方ない。とりあえず、やってみて駄目だったらまた考えよう。

「えっと、これでいいのかな？」

首輪に手をかざして、奴隷の魔法契約を結ぶと念じてみる。すると、頭の中に何かが流れ込んでくるような……。

そんな感じがして終わってみれば、なぜか俺はエイナの主人になったという確信を持っていた。

其の貳（改）（後書き）

プロットなし、推敲ほとんどなしで書いているので、どこかで矛盾が出てくるかもしれません。

というか既にだいたい怪しいような気がします。

今後の展開で無理が出そうだったら修正します。

平成24年1月8日一部修正。

別に無理が出てきたってわけでもないんですけど、書きやすいように修正しました。

其の参(改)

「よろしくお願いいたします。ご主人様」

エイナはそう言つて頭を下げた。

よし、たつぷり可愛がつてやるからな、フッフツ。

「うん、よろしく」

「あの、ご主人様のお名前はなんとおっしゃるんですか？」

「うん？あー、そういえばまだ名乗ってなかったな」

名前……、やっぱり日本の名前だと分かりにくいかな？
どうするかな。名前の一部をとつて使うか。

「俺の名前はシンだ」

「シン様ですね。わかりました。これからはシン様とお呼びしてよろしいですか？」

「うん、それで頼むよ」

「さて、とりあえずはここを出ようか」

「はい、シン様」

檻を開ける必要がある。当然ながら鍵がかかっている。

「エイナ、鍵がどこにあるか分かるか？」

「はい、奴隷商人が持っているはずです」

「じゃあ、その奴隷商人はどこにいるんだ？どんな格好をしている？」

「たしかこの家の奥にいたと思います。赤い服装でした」

「そうか、ちょっと待ってるよ」
「はい」

奥の部屋に入る。

そこには、槍で胸を一突きにされたのか、赤い服の男が血だまりに沈んでいた。

こいつが奴隷商人か。

周囲には持ち物と思しき、荷物や荷箱が置かれている。
さすがに商人というだけあるな。

この荷物は全部いただいていこう。

さて、鍵は……。

よし、あつたぞ。

おそらくこれだろう。

「エイナ、あつたぞ」

「ほんとですかっ！？よかつたです!」

檻を開けてやる。

出てきたエイナは、俺の肩くらいの身長だ。

俺が180cmだから、150〜155cmくらいかな？

小柄ながらスタイルは抜群だ。出るところは出ていて、引つ込むところは引つ込んでいる。

たまらんね。

「エイナ、お前は一生俺のモノだ」

「え？あ、は……、はい。よろしくお願いします」

「うん、大事にしてやるからな」

「はい、うれしいですっ!」

納得するのが早すぎないか？

こんなもんか？

ちよつと天然か？

まあ……、いいか。

「よし、エイナ、これから荷物を集める」

「荷物……ですか？」

「そうだ。俺は金も服も何も持ってない。エイナもそうだろう？だから、この村からありったけ頂こうと思う」

「でも、アクナルド王国には憲兵がいます。憲兵に見つかった場合どうなるか……」

「憲兵がいるのか……」

憲兵か……。山賊の奴らは大したことなかったが、憲兵となるとどうかな？

訓練されてるだろうし、山賊よりは強そうだ。

それでも俺のスピードにはついてこれないような気がするが、問題は魔法だな。

山賊の奴らは数人しか魔法を使ってこなかったが、憲兵はみんな使えるかもしれない。

もしそうだとすると、魔法について全く詳しくない俺はかなり不利になりそうだ。

……、ここは安全策でいくか。

「エイナ、もし憲兵に問いただされても『俺たちは関係ない。山賊が仲間割れでもしたんだろう』と思われるようにすれば大丈夫だと思わないか？」

「えっと、そうですね。たぶんそれなら大丈夫だと思います。」

「よし、それなら、主に奴隷商人の荷物を貰っていこう。それで、商人のふりをして移動する」

「そうですね。分かりました」

「じゃあ、始めよう」

「はい」

エイナとともに奴隷商人の荷物を集める。

集めながら、中身を確認すると、女性向けの服やら貴金属やらが入っているものもあった。

エイナとセットで誰かに売りつける腹だったのか、それとも普通に商売用か。

まあどうでもいい。金にさえなれば。

他には金とか服とかだな。まあこんなもんか。

金と服さえあればまあなんとかなるだろ。

「シン様、馬と馬車はどうしましょう？」

「そうだな、いただいでいこうか。エイナは馬に乗ったり、馬車を操ったりできる？」

「はい、一応やったことはあります」

「よし、それなら安心だ。エイナに馬車をお願いすることにしよう」
「はい、分かりました」

馬車があればより商人らしく見えるだろう。

とりあえずの仮の姿だが。

そうだ、武器もほしいところだな。

この大きな家を守っていた風の奴ら、あれは多分傭兵か何かだろう。あいつらの剣はなかなかよさそうだったな。

鎧やら何やら着てるやつもいたし、武器、防具なんかもいただいでいこう。

「エイナ、外の傭兵みたいなやつらからも武器なんかをいただいでいくことにする」

「はい。シン様は武器をお持ちでないんですか？」

「うん。今は特に持ってないが、刀なんかがあればいいなあと思う」

「カタナ……ですか？それはどういう武器ですか？」

「え？刀を知らないの？」

エイナがコクンと頷く。

「そうか、刀ってないのか。まあいいか。剣でも」

「？」

「まあいいよ。とにかく武器とか鎧とかで良いものがあればいたでく。」

「はい」

「そうだ、エイナは戦いとかはできないのか？その……、精霊魔法とかで」

「えっと、相手に攻撃するとかはあまりできませんが、防御の精霊魔法はそれなりにできると思います」

「そうか！それはかなりありがたいぞ！」

「ほんとですか？お役に立てそうでうれしいです！」

防御魔法が使えるなら、うまく連携すれば大人数相手でもなんとかなりそうだ。

よかった。どんな状況でもなんとか生きていく見通しが立ちそうだ。今更だがこの命を懸けて生きているってかんじがしてきた。

よし、やるぞお！この世界で俺の思うがままに生きてやる。

可愛い奴隷や美人の奴隷なんかも手に入れてやる。

と、決意を新たにしていると、

「シン様、この剣はどうでしょう？」

「うん？おお、なんか業物っぽいな……。どいつが持ってたんだ？」

「あの、この傭兵の人たちのリーダーらしい人が……」

「ああ、こいつか」

たしか、あの魔法を使つてたやつだ。

こいつがリーダーだったのか。

それにしてもなかなか良い剣だ。おそらくだが。

わずかに細身だが刃は鋭く光っているし、鍔なんかの作りもしっかりしてるかんじだ。

装飾は華美でない程度に宝石が柄尻に埋め込まれているだけだ。

鞘は黒く、なんとなく刀の鞘を思い浮かべるものだ。

「うん、これは良さそうだな。これからは俺が使わせてもらうかな」

「はい、シン様ならきつと上手に使われるでしょうね」

「他には何かなかったか？」

「はい、他には短剣もありました。これです」

「お、これも作りが良さそうだな。……、これはエイナが持つておくか？」

「え？ よろしいんですか？」

「別に奴隷が剣を持つてちゃいけないって訳でもないんだろ？」

「はい、そういうことではないんですけど、奴隷に高価な物を与えるというのはあまりないと思います」

「そういうものか。でも、まあ、いいよ。俺としてはエイナを大事にしたいし、もしものときはその短剣で自分の身を守ってほしいんだ」

「……うれしいです。私のことを考えてくださって」

エイナはなんだか赤くなつてうつむいてしまっている。

うーむ。おそらくいい傾向だろう。よしよし。

ところで、この傭兵たちの鎧はいただきたくねーな。

ボロボロだし、血で汚れてるし。

「もう荷物はこんなもんかな？ あとは食料を集めて出発だな」

「そうですね。食べ物を集めますね」
「うん」

こうして、荷物、武器、食料、その他細々としたものを集め出発することとなった。

其の参(改)(後書き)

上手く書くとうとして筆が進みませんでした。

が、どうせ書き始めたばかりの自分が上手く書けるわけがないと開き直って、とにかくがむしゃらに書くことにしました。

とか言いながら、未だにプロットなし、推敲ほとんどなしなんですから、

まだまだ未熟ですが、きちんと書き続けていきますのでよろしくお願ひします。

平成24年1月8日一部修正。

其の四（改）

まずはフィリオという街へ向かう。

エイナも詳しくは知らないらしいが、フィリオという街はそれなりに大きな街であり、貴族の直轄地でもあるそうだ。

アクナルド王国というからには、王様がいるんだろうし、その下（かどうかは分からないが）には貴族がいるということなんだろう。

馬車の御者はエイナに任せてある。

今のうちにいろいろ訊いておくか。

「エイナ、憲兵というのはどういう組織なんだ？」

「憲兵は、一定の大きな街に配置されていて、その街を中心としたエリアを巡回し、犯罪を取り締まっています」

「なるほどな。だいたい警察と同じみたいなものかね」

「ケイサツ……とは何ですか？」

「ああ、いや、気にするな。それより、憲兵というのはどれくらい強いんだ？」

「そうですね……、少なくともさっきの山賊よりは強いと思います」

「まあ、それはそうだろうなあ」

「あ、でも憲兵より騎士のほうが強いです」

「騎士？」

「はい。ご存じありませんか？」

「うん。よく知らない。教えてくれ」

「騎士は、王国直轄の騎士団と、各貴族の騎士団がいます。王国騎士団は王国首都アクナルドに、各貴族の騎士団は各貴族の直轄領に駐屯しています」

「なるほど」

おそらく騎士団のトップクラスがこの国最強の人間だろう。

普通にしていれば、会うことはまずないだろうが……、自由に生きてると公権力と敵対することもないとは限らないな。

とにかく自分の強さの把握だな。

先の対山賊戦では、元の世界にいた頃とは段違いのスピードで動くことができた。

それについていけるだけの反射神経もあったように思う。

よく考えればあれだけ高速移動したにもかかわらず、脚に異状はないようだ。

さつき荷物を運んでいるときに気付いたが筋力も大幅に強くなっているようだ。

総合的にみて俺の体は異常なまでに強化されている。

当然ながら理由は分からない。

そういうものと納得するしかないか……。

こういうのを元の世界のネット小説では異世界転生主人公最強ものというのだろうか……。

そうだ、俺は魔法を使えるのか？

エイナと魔法契約を結ぶことはできた。

もし、魔法を使うのに魔力のようなものが必要なのだとすれば、俺は魔力を持っているはずだ。

「エイナ、魔法ってどうやって使うの？」

「えっ？ シン様は魔法をご存知ないのですか？」

「いや、知らないというか、使ったことがないというか……」

「でも、私との魔法契約はできましたよね？」

「うん、実は、俺の住んでいたところには魔法はないんだ。だから、魔法契約も……よくわからないけど、適当にやってみた」

「……、そう……なんですか。魔法はいくつかの種類と系統に分かれていますと言われています。魔法の素質がある人は何の道具もなしに、初歩的な魔法を使うことができますが、強力な魔法を使うには

魔法石などの道具が必要です。私はほとんどエルフの村から出たことがないのでこれくらいしかわかりません。」

「精霊魔法というのはどういうものなの？他の魔法と区別されてるの？」

「はい、精霊魔法はその名の通り、魔法によって精霊にはたらきかけて効果を発動してもらうのですが、普通の魔法とは異なる系統とされています」

「そうなのか。俺は精霊魔法は使えないの？」

「はい、精霊魔法はエルフにしか使えないと言われています。ですが、エルフ以外でも使うことができた者もいたという言い伝えもあります。そのほとんどは歴史に名を残す大魔道士ですが」

「なるほど。エイナは普通の魔法の使い方は知らないんだ？」

「すみません。私も普通の魔法については学んだことがないので、よく分からないんです」

「いや、分からないならいいよ。じゃあ魔法石っていうのは？」

「え？魔法石というのはシン様の剣についている宝石のことですよ？」

「え？」

「あ、シン様はご存じないのでしたね。魔法石を使わなければ強力な魔法を使えないので、武器や腕輪などに魔法石を埋め込んで戦いに使うというのを聞いたことがあります。その剣もそうです」

「ああ、たしかにこの剣を使っていた傭兵のリーダーみたいなやつは魔法を使っていたな……」

「はい」

「そうか、となると、あの山賊の頭みたいなのやつも魔法石をもっていたのか？」

「おそらく、そうだと思います」

「ちっ、そいつも盗ってくればよかったな。まあいい。とりあえず一つ手に入ったわけだし。エイナにも魔法石がほしいな」

「あ、いえ、精霊魔法には魔法石は必要ありません。精霊と会話が

できれば魔法が使えるので」

「……そうなのか」

まあいいか。まだ魔法の使い方はわからないが、そのうちなんとかして覚えるって程度でも、今のところはいいだろう。

それより……、

「エイナ、さっきの傭兵や山賊とかエイナの言葉の精霊魔法が使われたときに光って見えただけど、俺が魔法契約を結んだときは何も光らなかったよね？あれはどうしてなの？」

「光……、ですか？」

「うん、光」

「あの、魔法が使われるときに光が見えるのですか？」

「え？うん、たしかに光が見えたよ？」

「私の知っている限りでは魔法が使われるときに光が見えるということははずです……」

「そうなの？じゃああれはなんだったんだろうか……」

普通は見えないのか。

となると、俺だけに見えるのか？俺の目がおかしくなったのか？

俺が使ったときは見えなかった。

それが魔法契約だからか？それとも俺が使ったからか？

魔法についてまだ知識が足りないから保留だな。

今のところ分かるのは、魔法が使われると俺にだけ光って見えるらしいということ。ただし、俺が魔法契約をした場合は見えない、ということだけだ。もつとも、いずれにも例外があるかもしれないが、ともかく自分以外の誰かが魔法を使おうとするときに光って見えるというのは、かなり便利かもしれないな。

少なくとも目をそらさなければ、魔法が使われるのが丸わかりになるわけだから。

俺自身がこの世界に来てから変化したと思われるのは、今のところこんなもんか。

さて、少しだけ気になっていることもあるな。

「エイナ、なぜ君はすぐに俺について来ようと思ったんだ？」

「……実は、私は精霊魔法で、シン様が山賊たちを倒すのを見ていたのです。吸血鬼にも比肩しうる強さだと驚きました。このまま奴隷として生きていくならシン様のように強いお方にこそご主人様になつていただきたいと思ったのです」

「……、そうか。エイナは俺の初めての奴隷だ。俺の奴隷になつてよかったと思わせてやるよ」

「はいっ！うれしいです」

……、よく分からんが強い人が好きということなんだろうか？

まあなんにせよ好かれているのだから問題ないだろう。

というか、そんなことより、吸血鬼って……。そんなのいるのかよ。しかもやたらと強そうな話しぶりじゃねえか……。気を付けよう。

などと話しているうちに、日が暮れてきた。

今夜は適当な場所に馬車をとめて野宿かな。まあ馬車の中で寝られるだけましかな。

「エイナ、そろそろ日が暮れてきた。フィリオまではまだ遠いんだろっ？」

「はい、あと半日くらいはかかると思います」

「じゃあ、太陽が沈んでしまう前に、どこかで野宿の準備でもしよ

うか」

「分かりました」

こうしてエイナとの初めての二人の夜は野宿ということになった。

其の四（改）（後書き）

平成24年1月8日一部修正。

其の伍

「エイナ……、もつお前は俺のものだ」

「はい、シン様……」

「好きにさせてもらっぞ……」

「……、はい。どうぞ、私を自由にしてください……」

（18禁につき描写を省略します。ご自由に妄想してください。）

という事があった。
事後である。

いきなりである。

だが、エイナも準備というか心構えができてたように見えた。おそらく奴隷になったときから覚悟していたのだろう。

しかし、よかった。

童顔ながらも、あの胸。まさしく巨乳というやつだ。Fカップくらいだろうか。

しかも、きちんとかくびれていて余計な肉がついていない。

ヒップから太ももにかけては程よく肉がついていて、綺麗なラインを描いている。

肌は白くすべすべ。うーんたまらん。何回もしたが、もう一回……。いや、もうエイナは気を失うように寝てしまった……。無理やりというのも悪くないが、今日はそんな気分でもないな。

最後に「初めてがシン様でよかった……」と言っていたなあ。

これからまずとかわいがってやろう……。

俺も眠くなってきた。

寝るか……。

……。

其の伍（後書き）

仕事が忙しくてしばらく放置してました。すいません。
まあなんとかかなりそうなので、再開のつもりです。

其の六

朝になり、目が覚める。

「おはようございます。シン様」
「ん、ああ、おはよう」

エイナが少し顔を赤らめながら挨拶をしてくる。
なにやらもじもじしている。
昨晚の初夜のせいだろうか。
かわいいものだ。

「エイナ……」
「シン様……」

朝から濃厚なキスをした。

これからも朝にはいろいろしてもらおうとするか。

「シン様、朝ごはんの準備をしておきました」
「おお、そうか。ありがとう」

かつぱらってきた肉と野菜のスープだ。
なかなかうまい。

エイナはかわいいし、気持ちいいし、料理もできる。精霊魔法も使えるし。

これは最初から当たりを引いたといえるだろうな。
さて、これから、フィリオという街に向かうわけだが……。
何も考えずに街に入るのはいかなものかな……。
ある程度エイナから情報を聞いておいて、方針を決めてからにすべ

きだな。

まずは状況の整理から。

エイナについては、防御の精霊魔法が使える。どの程度か？短剣を持たせてある。どれくらい使えるか？

俺については、黒鞘の細身の剣、これには魔法石がついている。剣を使つての戦闘は一応できるが、この世界に来てから向上した身体能力まかせて技といえるようなものは何一つ身についてはいない。魔法石にいたっては使用方法さえ不明。

俺が魔法をどれくらい使えるかも不明。

エイナは精霊魔法しか使えないようだし、魔法についてはそのうちきちんと勉強したいところだ。

金、食料、服なんかはかつぱったものがあるし、売れそうな豪華な服や装飾品もある。

いらないものは全部売ってしまおう。金と食料があればいい。金？どういう貨幣制度なんだろうか？

馬一頭に馬車一台。これは移動に便利だし、とりあえず持つておう。

最大の問題は、これからどうやって生活していくかだな。

どうせならエイナみたいにかわいい奴隷なんかをもっと手に入れたい。

傭兵なんかも思いついたが、奴隷を囲うというのは難しそうだ。

奴隷を囲うことができるようにしながら、金を稼ぐ。そして奴隷を買うといったところか。

不確定要素が多いな。いつか金は尽きてしまうし、とりあえずは金を稼ぐ手段が必要だ。

エイナの防御魔法次第では他の奴隷を守りながら旅をするというのもできそうだが……。

ああ、思考がまとまらなくなってきた。

「エイナ、ちょっと訊きたいんだが」

「はい、なんでも訊いてください」

「まず、エイナの精霊魔法についてなんだが防御の魔法ができるんだよね？」

「そうです」

「どれくらいの攻撃を防御できるんだ？わかりやすく教えてくれ」

「そうですね……、あの山賊の爆発する魔法と同程度の魔法でしたら防御することができると思います。それ以上となると試してみないとわかりません」

「なるほど。防御するというのはどういう形で防御できるんだ？例えばあの爆発の魔法ならどういう風に防御する？」

「あの爆発の魔法でしたら、風の精霊魔法で空気の壁を造って防御できると思います」

「ほう。なんとなくイメージは分かる気がする」

「じゃあ次だ。短剣を持たせたと思うが、短剣は使えるか？そもそも剣を使ったことは？」

「剣を使ったことはありません」

「そうか。でも、まあ無いよりはましだろう。護身用に持っていてくれ」

「はい、ありがとうございます！」

「では、金についてなんだが、こっちではこの金貨、銀貨、銅貨にはどれくらいの価値があるんだ？」

俺はそう言っ、かつぱらった金を指差した。

「そうですね。だいたい金貨1枚で銀貨10枚、銀貨1枚で銅貨100枚になるはずです。この小さい銅貨は半銅貨といって銅貨の半分の価値があります。だいたい銀貨1枚で一家4人程度が一ヶ月生活できると思います」

「なるほど、わかりやすいぞ」

「ありがとうございます！」

エイナは褒められてうれしいのか、ニコリ微笑んでいる。
今手元にあるのは金貨37枚、銀貨61枚、銅貨132枚、半銅貨78枚か。

あの商人なかなか金を持ってたんだな。
それもそうか。傭兵を何人も雇っていたし、エイナといういかにも高く売れそうな奴隷を持っていた。
おそらく奴隷や装飾品なんかを金持ち相手に売買する商人なんだろう。

そっぴやエイナっていくらになるのかな？

「あの死んだ商人、エイナをいくらで売るつもりだったんだろうか」
「……、金貨1000枚は間違いなくと言っていたと思います」

「え？1000枚っ！？それはすごいな……」

「……シン様、私のことをお売りになるのですか？」

「いやいやいやいや、何言ってるの？エイナはずっと俺の物だよ？俺が死ぬまでそばにいてもらうから」

「はいっ！！」

エイナはなにかとてもうれしそうだ。
さっきよりもすごくニコニコしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8075v/>

自由な世界で

2012年1月8日23時52分発行